

普遍性と特殊性

この夏の国際会議から

津守 真

—

この夏のはじめ、私は南米コロンビアの幼児教育大会とOMEP世界理事会に出席するため、コロンビアのボゴタにゆき、夏の半ばには、韓国の馬山にある慶南大학교の講義、夏の終わりには大阪で開かれたOMEPアジア太平洋地域幼児教育・保育国際会議と、国際的なことで忙しく過ぎた。日本の国が否応なしに、世界へと押し出されてゆく時代

に生をうけて、私共子どもの仕事をする者も、世界と交わることを避けられない。この夏、私は日ごろ考えていることを、外国の人々に話す機会を得て、表現は不十分ながらも、ある程度の理解を得られたようだ。それぞれの国の社会的状況は異なつても、子どもの仕事をする者には殊に人間として共通なことがあることを信じてよいのだと思う。それは、外国人にとつても同様であ

ろう。私共が共感を表現する」とによつて、その部分は、より一層ひろい範囲に共通なものとなるであらう。忙しい夏の日々の中で、とくに心に留まつたレポートのいくつかを紹介したい。

その第一は、コロンビアで元OMEWorld

総裁のグタールから手渡された、「幼児教育における普遍性と国による特殊性」(The Universal and the National in Preschool Education)で、一九九一年、十二月にモスクワで行われたOMEWorld国際セミナーの報告書である。(注) その冒頭に、グタールは、

「幼児は文化を知覚するのに繊細であり、また、その変動にも敏感である。成長と共に、ひとつのあるいは幾つかのノミコニティと自分が同一化し、そして、文化の相違にも気付いてゆく。」

書である。(注) その冒頭に、グタールは、幼児教育において普遍的なものは何かを問うている。「幼児教育学の専門家であるわれわれにとって、子どもの発達の科学は、普遍的な道具である。しかし、西欧諸国においては、この知識は、より一層教育効果を上げるために用いられてきた。このことが、何故、

他の分野の成果をも考慮にいれることが必要になったかの理由である。」とグタールは言う。そして、科学的認識以前に、子どもは小さな人間であり、人類のメンバーのひとりであるという認識こそ普遍的なことであると指摘する。

が、この普遍性と同一化し、それに自分自身を関連づける能力をしばしば失っている。」

手”であるという自覚と自己実現の力を発達させること」

「今日、人々は複雑な複合した文化の中にあつては、他からの分離を考えるのではなく、他の文化やコミュニティとかかわりつつ、特定の文化の中で生きるのである。子どもたちは、この開かれた創造的なプロセスの積極的な担い手である。」

「このように論じてきて、グタールは、O M E P の観点から、次のように述べる。

「このことのために、O M E P は子どもたちが次のようなことができるよう試みる。

1、過去、現在、未来の異なる文化の中に入間性を認識し、実現すること

2、地球上に存在するすべての人や、すべての物との連帯の感情をつくること

3、子どもも、私共自身も“人類の担い手”であるという自覚と自己実現の力を発達させること」

このモスクワのレポートの中の多数のものが、ロシアおよび近隣諸国と東欧諸国の人々によるものであるが、その大部分が遊びを強調し、人間的成长に価値をおいていることはこのレポートの特長である。たとえば、モスクワの幼稚教育研究所のニコライ・ボディア

コフは言う。「ロシアの幼児教育プログラムの基本原理の中で最も重要なことは、子どものが成長、ペーソナリティー、創造性を尊重することである。……これは幼稚園における教育と保育 (upbringing) のプロセスを豊かにする。……伝統的には、芸術的発達は芸術についての知識や技術の獲得を意味した。しかし、それとは逆のことがいま起ころつた。固定した規律を変容すること——枠から出て、新しい未知の分野へと足を踏み出してゆくこと、新しい規準と美のモデルを創ることである。」

同じくモスクワの幼児教育研究所のジェナディイ・クラフトソフは言う。「新しい教育原理は、家庭保育 (family upbringing) の優先である。公的な幼児教育は家庭の補助機関である。……かつて教師は教育のプロセスの中心に位置していた。すべての活動は教師

によってコントロールされていた。……しかしあれわれは、子ども自身の経験にもとづいた子どもの活動を励ます。イニシアティブは、子どもたち自身にあるのであって、教師にあるのではない。われわれは、熱心で、利己的でない、創造的な教師を必要としている。



る。」

リトニアの教育研究所のヴィタリア・グラツエーネは言う。「幼児教育の内容とプロセスは、人間的になされねばならない。もつと民衆的ななされねばならない。そして子どもの必要にもつと即応してゆかねばならない。……幼稚園が伝統的なやり方をやめるのは困難なことである。しかし、われわれはそれをせねばならぬ。そして、子どもたちが世界の一致と調和を実現してゆくのを助けねばならぬ。」

このような論調でレポートはつづいてゆく。日本の新聞でみてみると、崩壊した旧ソ連諸国の経済的困窮のみが語られる。しかし、その困難な生活の中で、人間を尊重し、人間に焦点をあてた教育が着実に進行しつつある。コロンビアから帰途の飛行機の中でこのレポートを読みながら、この国々の二十年、

三十年後の発展を想像し、また、子どもを育てる仕事にたずさわる人々の底辺に流れる人間性を感じて、豊かな気持ちになった。

二

コロンビアで、一日、OMEPEの前世界裁判バルケが、小さな集まりで、「子どものとき、何故、遊びが大切なのか」という題で話された。それは私共が幼児の保育の実践で経験していることをよく言いあてていた。

「子どもたちと交わり、子どもたちが自由に自己表現するのを許される状況での子どもを見る者はだれでも、遊ぶとは、どういうことかを知っている。その同じ遊びが、しばしば、何か別のもつとよいものに到達する手段と、大人たちの眼には映っている。学習を高めるように、子どもたちを遊ばせなければならな

いという教育学説がしばしば聞かれる。そういう説明をしないと遊びが受けいれられない。これでは、遊びを、目標に到達させる活動のひとつにしてしまう。遊びは、子どもにとつてひとつ的方法としての意味しかもたないのであろうか。

こういう問い合わせ始まって遊びをいろいろの角度から定義づけて後、バルケは、具体的な自分の経験に言及する。

「私は幼稚園や保育所の場面からはなれて、家庭に目を移そう。時間が構造化されず、生活がゆっくりと流れる家庭の場面で、

子どもたちは最も元気に遊ぶ。私は、三人の男児の母親として、またひとりの女兒の祖母として二重の喜びを体験した。この女兒はあるとき両親とバリ島に旅行した。バリにいたことのある人は、あの踊りの色彩や音に印象づけられるだろう。その子は、ホテルの居

間にもどるや、その印象を再現することに熱心に取り組んだ。あらゆる布を持ち出し、違った色のバンドを用いて着飾り、その踊りを再現するのに祖母を引き込んだ。一時間もたっぷりと踊った後、突然、祖母を着飾らせ、役交代した。……」このことから、更にバルケが幼稚園の先生をしていたときの同様の体験に言及する。「子どもたちは学習していたのか？たしかに、彼らは一緒に仕事をすることを学んだ、そして同時に、彼らは楽しんだ。……大人がかかるとき、大人はしばしば遊びをこわしてしまう。」

このような遊びの過程が語られるのを聞くと、これはどこの国にも共通の保育の事実であることを悟らされる。それは子どもの中にある人間としての普遍性に由来する。

三

この夏、八月二十三日から二十六日まで、大阪で、OMEПアジア—太平洋地域幼児教育、保育国際会議が開催された。大阪の幼稚園、保育園の方々のご努力によって募金もなされ、アジア二十二か国がこれに参加した。

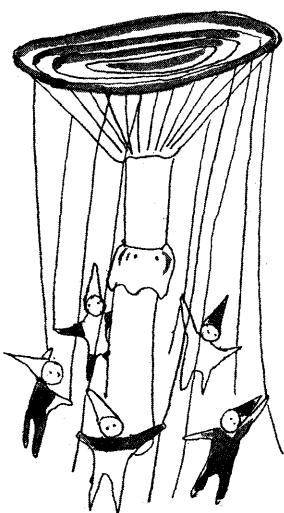
こんなに多くのアジア諸国の保育関係者が一堂に会したのは、おそらくはじめてのことではないだろうか。一晩、インターナショナルの夕べには、各国から歌や踊りが披露された。繰り返しの多い踊り、歌の調子などをみていくうちに、私共の文化の源流にもどつてゆくような気分になつた。アジアの人たちの集いにはある種の親近感がある。それと共に、近年の歴史や現状を思うとき、心が痛んだ。最終日、アジア代表者のシンポジウムのとき、ベトナムの代表の人が次のようなこと

を言つた。日本も、四十数年前には貧困と社会的混乱の中についた。四十年の間に、どうしてこのように繁栄するに至つたのか、幼児保育関係者として日本の人に教えてほしいと。私はとつさに、ベトナムはいま経済的に貧困かもしれないが、精神的には豊かなのだと思う、日本は物質的に裕福かもしれないが、四十年前の困難な時代の精神的豊かさを失つてしまつた。もう一度その原点に立ちもどつて、一緒にやつてゆきたいという趣旨のことをのべた。これらの国の人々に経済的援助が必要なことは言うまでもないが、それ以上に、精神的励ましを必要としているのだと思う。子どもの仕事をする者は、子どもと社会の中間に立つて子どものために戦つている。そのことは、何処にあつても共通のことである。どうすればよいかはそれぞれの社会状況によつて異なるけれども、人間が生きや

する生活を、今日は実践の中でいへる努力をしていへるが、保育者に共通でおねへ。

日々の保育の実践者にいへば、国際的なつながりが無縁なまゝにならぬ。しかし、他の日々の生活にいへ、世界中の保育者が結ぶ命わせる普遍性がある。

(愛育養護学校)



The Universal and the National in

Preschool Education, Papers from the

OMEP International Seminar, Moscow,

4-7 December 1991, published by
OMEP World Organization for Early
Childhood Education and UNESCO,
The YCF Project, UNESCO, 7 place de
Fontenoy, 75352 Paris 07SP, France.